

2011ふゆトピア・フェア in 札幌
ふゆトピアシンポジウム
雪がつくる人の絆
Snow bonds human beings.

国土交通省北海道開発局開発監理部
開発調整課

「2011 ふゆトピア・フェア in 札幌」は、冬の安全安心な生活の確保や冬の魅力を活かした地域づくりの取組について行政や市民、企業、NPOなど多様な主体が一堂に会して情報発信や意見交換を行うことにより、多様な主体の連携・協力による冬の課題の解決、冬を活かした地域づくりの総合的な取組を推進することを目的として、本年1月21日から22日の2日間、札幌市で開催されました。札幌コンベンションセンターをメイン会場として、「雪がつくる人の絆」をテーマにした、ふゆトピアシンポジウム、ふゆトピア展示会、ふゆトピア研究発表会、除雪機械展示・実演会の四つの取組を中心に、関連イベントの同時開催も行われ、2日間で延べ約8,000人の参加をいただきました。

1月22日(土)に開催されたふゆトピアシンポジウムでは、冬の安全安心の確保、冬を活かした地域づくりや観光振興をテーマとした二つのセッション構成で、パネルディスカッションが行われました。

本稿では、パネルディスカッションの概要について報告します。

ふゆトピアシンポジウム

セッション①

安全で安心な冬の暮らし

～共に考え、共に悩み、共に行動する～

岸 除雪の水準とか雪対策のあり方は私どもの冬の生活に大きな影響を及ぼします。40、50年前と比較すると、今の除雪の水準は技術の開発によって非常に向上し、冬道を短靴で歩くことが当たり前になっています。しかし、今は財政事情が厳しく、除雪のあり方も、行政任せではなく、昔の、雪があることを前提として市民一人一人ができることをやっていた時代がまたこれから必要になるのではないかという問題意識を持っています。



本日は、いろいろな立場で活動をされています皆さんとともにこうしたことを考えていきたいと思えます。

赤坂 清田区北野朝日ヶ丘町内会は急斜面が多いという地形条件のため、冬を迎えると、狭い道路、行き止まりの道路、坂道のつるつる道路に対してどうするか。あるいは、災害が起きたらどうするかという課題があります。昨年6月6日、「地域とつくる冬道事業」ということで、豊平区の土木センターと朝日ヶ丘町内会共催で懇談会を開きました。その中で、除雪課題マップ作りをしました。どこを重点的に気をつけていくか、業者さんにも入っていただき、やれるかやれないかも含めて話し合い、私たち地域町内会としても、何が協力できるか地図上に落とししていく。

懇談会をやる前は、土木センターや除雪センターに文句の電話を入れようという発想がほとんどでした。ところが今年になり、共にできることをやろうと、意識が非常に変わってきています。

一番大事な地域町内会、一番眠ってはいけな地域町内会が多角的、多面的な見方で、住民が「できるところから進めていこう」と考えていく。大人だけではなくて子供までこうやっている姿をお年寄りが見て、「私たちも元気を出してやっていこう」という相互効果が生まれたらと思います。そんなときに困るのは、意識の差です。そこを今後どうしていくかが課題ですが、身近に懇談することが大事と考えています。

新保 うちの学校は大変狭い通学路が1本で、ここを子供が400人通ります。歩道は車道に向かってちょっと斜めになり滑りやすい状態です。自分たちでもできることはということで、砂を札幌市から一冬に1,500袋ぐらいいただき、先生や保護者、地域みんなでまいて、子供を守っています。ただ、砂まきだけではうまくいきませんので、札幌市で初めてのことで、通学路の雪をグラウンドに排雪すればコストも低く済む

のではないかとということで8年前からやっています。大きなスキー山ができますが、道路の雪は汚れていますので、春にはお父さんたちでごみや石を拾います。

赤坂会長からも意識の差が大変問題だとありましたが、結局、子供も大人も知らないということが非常に大きな課題だと思います。うちの学校では、お母さんたちに実際に除雪機に乗ってもらい、どれぐらい見えないかという体験をしてもらいました。それで少しずつ分かっていく。ご町内の方、保護者、学校、みんな学んで知るところから、意識が変わっていく。小学校というのは保護者も子供も地域の方も、みんな集まる場所です。おじいちゃん、おばあちゃんもお孫さんの授業は見に来ますので、やり方によってはいい冬の道場になるということです。

私は最近、冬になってくると、自分たちはものすごくきれいなところに住んでいるのだと思うのです。

1月2日に三角山へ登ったのですが、登山道に地域の方がお供えしているのです。ご来光です。感動します。こういう感動をすると、人が動くのです。ボランティアの皆さんと札幌市とで一緒に作ったロープがあります。これがあるので、真冬でも毎日、たくさんの方が登っています。ルールもみんなで作りました。誰かに何かをお願いするというのではなくて、みんなで工夫している。この美しさを知って、日常の幸運を分かち合うという視点からみんなの意識が変わっていくと、何かみんなでやるのが喜びに変わる。そういう可能性もあると、私は思っています。

上島 当社のCSR^{※1}活動の一環として、同じ区にある札幌国際大学の学生さんたちと一緒に3年前から、特に清田区内の老人宅や弱者世帯といわれているお宅の除雪のお手伝いをする取組をしています。この取組で一番よかったのは、お手伝いしに行くと、お年寄りから大変喜ばれるのです。学生たちと話ができるからで



コーディネーター
岸 邦宏 氏
北海道大学大学院工学
研究院准教授



パネリスト
赤坂 治雄 氏
札幌市清田区朝日ヶ丘
町内会会長



パネリスト
新保 元康 氏
札幌市立山の手南小学校
校長



パネリスト
上島 信一 氏
北海道コカ・コーラボ
リング(株)営業統括本部
執行役員



パネリスト
金村 直俊 氏
ウィンターライフ推進
協議会幹事長



パネリスト
山口 壽道 氏
社中越防災安全推進機構
事務局長

す。「明日来るといっていたから、お菓子も用意して待っていた」というのです。普段は困っていた雪が、こうした新しい交流の場面ができたことで少しだけうれしい雪になったと学生たちと一緒に感じています。

民間は、正直いいまして、そんなにたくさんのはできません。当社が取り組んでいるのは、地域モデルのきっかけづくりだろうと思っています。

小さな企業さんも、この地域でお世話になっている会社として地域に役立ちたいと思っていますが、なかなかそのきっかけがないのです。地域連携のパートナーとして関係づくりをしていくプラットフォームの役割を企業や行政が行うことにより、新しい環境づくりにつながっていくのではないかと思います。

もう一つ大事なことは「持続性」です。企業はただコスト負担とか寄附という話になっていくと、利益を逸失していくことになりやすから、そこはすごく難しい。事業活動とどうバランスを取っていくかということになりますが、一般的に奉仕活動というのは肉体的にも経済的にも負担が生じるわけです。こういった何となくネガティブっぽいイメージを、あまり強要するとか負担をかけるとかにならないように、楽しい、うれしい、面白いということに置き換えていかないと、続かないのではないかと思います。民間的な発想ですが、大変なことを面白いイベントに仕上げていくことが、継続させていくことになるとも思います。

金村 ウィンターライフ推進協議会では、平成19年度から靴のメーカー、介護予防、出版社、コミュニティーFM、気象機関の方々が集まって、「冬を楽しく、明るく活動しよう」をモットーにいろいろなことに取り組んでいます。取組の一つは「つるつる路面における歩行者の転倒防止の取組」です。特にご高齢の方は冬に転んでけがをするのが恐いとまったく外に出なくなるというケースもあると聞き、何かしなければいけないと思いました。転倒を防ぐためには、砂をまくなど、まず路面を滑らないようにすることです。もう一つは、転ばない歩き方をみんなで勉強しましょうということ

で、札幌市の介護予防センターで開催される講習会などに講師を派遣しています。

昨年、今年と、通勤・通学などで歩いているときにつるつる路面があったという情報を携帯電話から簡単な操作で報告していただき、インターネットで公開しています。昨年はその情報の集計結果を基に、「こういう情報が出たら砂まきをお願いします」と町内会、商店街、学校、企業を訪問しました。しかし、課題もあります。寄せられる情報には波があり、偏りがあります。また、高齢者がインターネットを見る環境にない。ただ情報を提供すればいいわけではなく、砂をまくなりして改善していかなければいけない。そのためには人手が必要になります。そういったところをこれから解決しなければなりません。

みんなが自分たちのできることを少しずつやっていくことで、情報の質も向上させることができるようになる。それが回り回って送り手側も受け手側も双方が恩恵を受けることができるような、よい循環を考えていかなければいけないと思っています。

山口 2006年10月23日に中越大震災が起り、そのときに社団法人中越防災安全推進機構、それからNPO法人中越防災フロンティアを同時に立ち上げました。中越地震からの復旧・復興には、官と民の間にある「新たな公」の存在、その領域を担う「中間支援組織」の存在が必要だと、私たちは今中越にいて、強く感じています。

06年の豪雪のときに全国で152人の死者がありましたが、05年も豪雪で、山の中に家を残して離村してきた人たちは、その家の上の雪かきさえできずに、バタバタと家が倒れていったのです。それを見て泣いているおばあさんがたくさんいました。何とかせなあかんというので始めたのが「越後雪かき道場」です。とにかく、使えないボランティアがいっぱいいるのです。受け入れる方も、誰が窓口になるのか、謝礼はいくら払えばいいかという話があって、ミスマッチするのです。私たちは、地域と参加者をつなぐため、除雪技術

の教育を始めました。指南書なるものを作って、地元のおじいちゃんが教えるのです。この人たちが戦力になってきました。指南役もとらの巻を作ったりして、地域も一生懸命やり始めました。

「持続可能性」というのは、持続していくためには幾つかのアプローチをしていかなければいけないというのが私たちの結論で、地域の持続可能性も獲得していかなければ駄目ですが、来る人たちのインセンティブ、それからいろんな仕掛けも作っていかなければいけない。官の力だけでは、民の力だけではいかんともしがたい部分がやっぱりあって、それをつなぐ役割が中間支援組織だと思っています。災害ではすごい数のボランティアの方々が来ますが、夏場ほど、もしくは冬以外の季節ほどボランティアは使えません。この人たちにもっと戦力になっていただく、もっと雪国を好きになっていただく、私たちとの関係性を強化していただくということを、集落の皆さんと一緒に地道にやっていきたいと思っています。ただ、自分たちも努力をしなければ駄目ですね。精いっぱいのもてなししなければ駄目だし、もらうだけではなくて、一生懸命与えなければ駄目なのです。その辺の関係性を今、一生懸命模索しているところだということが、もしかしたら今の中越の復興プロセスの最大の収穫かもしれないと思っています。

岸 いろいろな取組や仕掛け、課題の話題提供をしていただきました。官民協働とか、行政と住民の協働といわれて久しいのですが、今日のお話を聞いた中で、住民や企業の皆さんの取組をうまく活用すれば行政ももうちょっと効率的にできる部分があると思います。大雪で運搬、排雪を頑張ってもらうのは当然なのですが、それとは別に官民協働のあり方がこれからの課題なのかと思います。

セッション②

テーマ「冬の魅力が地域を灯す、世界を照らす」

～冬の楽しさ再・新発見～

石森 セッション②では、大きくはスポーツを通して冬の楽しさを再発見、新発見ということと、もう一つは、アートを通して冬の楽しさを再発見、新発見していくとどういうことになるかということが大きな柱になっていこうかと思っています。

森脇 私はスポーツトレーナーという立場を通して、人の動作を分析して、スポーツ選手の調整から高齢者の介護予防までやっています。今日来ていただいた方にぜひお伝えしたいのは、雪かきは最高のフィットネストレーニングであるということ。重要なのは、雪かきの前に出している腕の手首の向きを逆にし、後ろに引くようにして投げること。そういう動きをすると、背中を活性化させることができ、姿勢がよくなる。姿勢がよくなると内臓の圧迫が減るので、内臓的な健康も手に入れられる。そういう状況をいかに楽しめるかと思うのです。空から無料の健康器具が降ってくるといった発想の転換が、降雪地域に住む人たちにとっては必要かと思っています。

私はスキーのインストラクターを17年間していますが、17年前200人いた会員が年々減り、最近では20人ぐらいしかいないのです。何とかしなければいけないと、4年前に始めたのが「北海道スノースポーツミーティング」です。私たちの仲間が全員プロスキーヤーだったということもあり、スキー学習が減っている現実に対して、自分たちで最高に面白いスキー学習ができないだろうかということで、「スーパースキー学習」というものを始めました。プロスキーヤーが子供たちに北海道の冬の素晴らしさや夢を伝える。しかし、スキーはマイナーですのでスポンサーが集まりにくく、こういった活動をする際にも、交通費すら出せない状



コーディネーター
石森 秀三 氏
北海道大学観光学高等
研究センター長・大学院
観光創造専攻教授



パネリスト
森脇 俊文 氏
北海道スノースポーツ
ミーティング実行委員会
委員長



パネリスト
ロス フィンドレー 氏
株式会社NACニセコアドベン
チャーセンター代表取
締役



パネリスト
小田井 真美 氏
Sapporo 2 プロジェクト
プロデューサー



パネリスト
谷川 良一 氏
NPO法人グランドワーク
西神楽理事

況です。企業やアーティスト、スポーツ選手を含めてうまく連携が取れば、お互いにとってもいい関係ができるのだろうと、今日ここに来て非常に深く感じました。

私たち北海道スノースポーツミーティングの中できた「雪育」という言葉があります。最近、食育という言葉聞く機会も増えたと思いますが、雪かきの方法も雪育、除雪も雪対策も雪育ですし、野菜を雪の中に入れるのも、かまくらもスキーも雪合戦も雪育、そして歩き方も含めて、私たちは雪育を学ぶことで、雪のいい面だけを見るのではなく、つらい部分も受け入れ、楽しんでいくことができたと感じています。

フィンドレー 私は1989年に日本に来て、95年にNACニセコアドベンチャーセンターという会社を建てました。そのときはスキーブームもどんどんしぼんできて、ペンションやホテルがだいぶ苦勞し始めていました。それで、何かやらないと人が集まらないと思い、夏に「ラフティング^{※2}」というスポーツを起こしました。北海道では初めてでしたが、ニセコの夏も冬と同じぐらいの人数が集まるようになりました。今のニセコは英語、中国語のどちらかを話せないと仕事ができないぐらい、インターナショナルなリゾートになりました。オーストラリア人はけっこう簡単で、夜はパブがあり、昼はパウダースノーがあれば満足します。あとは、まちに降りて、地元の文化、地元の人たちと交流できると満足です。アジアのお客さんは、みんな滑れない。今年、一番いいコンドミニウムを2週間借りて、滑れない人たちが来ました。これがサンモリッツとかそういうリゾートだったら十分満足できるようなまちがあります。比羅夫はまだそこまでいっていない。ショッピングをする楽しみがない。アジアのお客さんに対しては、これからそういう方法に向いている商売とかサービスを増やさないといけないと思います。

一番課題になっているのは、倶知安町とかニセコ町にははっきりしたビジョンがないところだと思います。これからどこに向かい、どういうリゾートエリア

にしたいのか、はっきりしたシンプルなビジョンがない。行政の方で何ができて、何ができないというルール作りをしないと、投資する人たちは何でもありということになりますから、当然そういう動きをします。

比羅夫の場合は中小企業が多いので、従業員の取り合いになり給料が高くなっています。給料がよくなると、スペンディング・マネー^{※3}が多くなります。さらに、スペンディング・マネーをそのまま使って、まちにもっと多くのお金が回るという形になる。観光と経済を考えると、それが非常に大切だと思っています。

自分のまちが楽しくなる、自分のライフスタイルがよくなる、自分の子供たちが育っているところが楽しい、未来が見えるようなまち、そういう方向性が非常に必要だと思っています。

小田井 札幌には2003年1月に移ってきました。生まれは広島です。札幌に来て最初の2年間、冬うつ^{※4}になり、ものすごくしんどかったのです。何でこんなにしんどい思いをして北海道に住まないといけないのかと思いつつも、北海道の広々とした感じとか、札幌のすっきりとしたまちの構成とか都会的なところが何となく気に入り、しぶとく住んでいました。

アーティスト・イン・レジデンス (AIR) という仕事は、主に海外のアーティストを2、3カ月札幌に招聘して、滞在制作を支援する事業です。このときたまオランダからアーティストが来ており、モエレ沼公園の冬の芸術祭というイベントの中で発表されたのが「Sapporo 2 プロジェクト」というものでした。そのときにオランダ人アーティストが言い放ったのが、「何でそんなにしんどい？こんなにきれいじゃないか」「こんなにきれいな景色があって、君ら幸せだよ」ということでした。そのとき冬うつ真ただ中だった私は、なんだかよく分からないけれども、その言葉にすがるようにしてはい上がったのです。

Sapporo 2 プロジェクトは特に今年、「札幌をまるごと雪まつりにする」というタイトルを掲げてやっています。私たちのプロジェクトのゴールは、札幌に雪

※2 ラフティング (rafting)
大型のゴムボートで、パドル (かい) で操作しながら急流を下るレクリエーションスポーツ。

※3 スペンディング・マネー (spending money)
小遣い銭。

※4 冬うつ (鬱)
季節性情動障害で憂鬱なサイクルが初冬に始まり冬の終わりにおさまる冬型のものをいう。

を祝う新しい祝日を作ること。それを目標にして、冬の間、日々活動しています。

他には、感性豊かなアーティストと子供たちを出会わせる機会を作りたいということで、アーティスト・イン・スクールというものを始めています。アーティストが、小学校の空き教室を借りてアトリエにして、2週間単位で通うというプログラムです。

アートとかアーティストが雪という自然に対して何ができるのか、私たちも自問自答しながら過ごしていますが、今日もらった本当にいい言葉は「発想の転換」ということです。雪があることが特別だという北国独特の特徴を自分たちで認めて、北海道時間とか雪国時間という新しい時間感覚だったり、心の持ちようをもたらしたいと思っています。

谷川 グランドワーク西神楽は、1994年12月に当時の農業青年が自分たちの農業の未来を危ぐして、西神楽地域づくり研究会準備会というものを作りました。95年1月に阪神・淡路大震災があり、被災児童23名を地域と行政と企業で受け入れ、農家に民泊してもらいました。このことが一つの契機となり、さまざまな活動をしていった中で、2001年10月にNPO法人として認証されました。地元の会員は6割で、あとの4割は地元外の会員さんです。近くでは旭川市や札幌市、あるいは東京、大阪という地域外の会員がいるというのが一つの特徴になっています。その人たちに我々の気づかない地元のよさとか悪い点を指摘してもらいながら活動してきました。

主な事業としては「西神楽地域における冬期集住・二地域居住環境推進モデル事業」という、離農して出ていった空き家を再生して、5～10月まで、特に関東・関西圏の方々に低料金で長期滞在してもらい、そのお金で、冬場の12～3月は地域の一人暮らしのお年寄りに一緒に集住してもらおうということです。今一番問題になっているのは改修費です。こういうことをやるのにやはり資金が必要で、政策提言も併せてやっています。

それと、ウィンターサーカスです。ランドアート^{※5}のイベントで、今年6年目を迎えています。地元の小学校で「雪の授業」をし、この授業で作った子供たちの作品を展示します。すると親はもちろん、おじいちゃん、おばあちゃんたちが来る。そういう連携があるから、人も集まって、長く応援してくれる。あと、地元の企業と行政との連携の仕組みがある程度できたので、ずっと継続してきたし、これからも継続するというポイントがあります。地域の核は小学校なのです。小学校できちっと地域とのかかわりができると、中、高、大学になっても、きつとかかわってくれる。そういうことを大切にすることです。

もう一つは、本州の大企業ではなく、地元の企業とうまく連携するためには、行政が黒子に徹して知恵を出してもらおうことで、地域としてはそういう連携が非常に作りやすくなります。その2点をこれからはしっかり頭に置いて、自分の地域が無事であり続けるように頑張っていきたいと思っています。

石森 冬の北海道の雪の魅力を、道産子以上に世界が注目していますので、北海道の未来を考えたときに、今回のテーマである冬や雪というものの持つ意味が大きな可能性を生み出していくのだと思います。

しかし、パウダースノーという天からの贈り物があるから世界の中でも優れたリゾートができるというほど単純ではなく、きちんとしたビジョンを持って地域の発展を考え、さまざまな制度やシステムを整えなければいけない。北海道は官が重要な役割を果たしてきた地域ですが、すでに官は財政的に厳しい時代が来ている。そういう意味でも今後、企業など幅広い社会的な連携が重要になるでしょう。

本日は、パネリストの方々の大変素晴らしいご意見を通じて、皆様方も冬の楽しさの再発見、新発見があったのではないかと思います。冬や雪を一つの大きな資産として、新しい北海道のポテンシャルが開かれることを祈念いたしまして、セッションをお開きとさせていただきます。

※5 ランドアート (land art)
古代の巨石群のように、自然の中に置かれた大規模な空間芸術。